

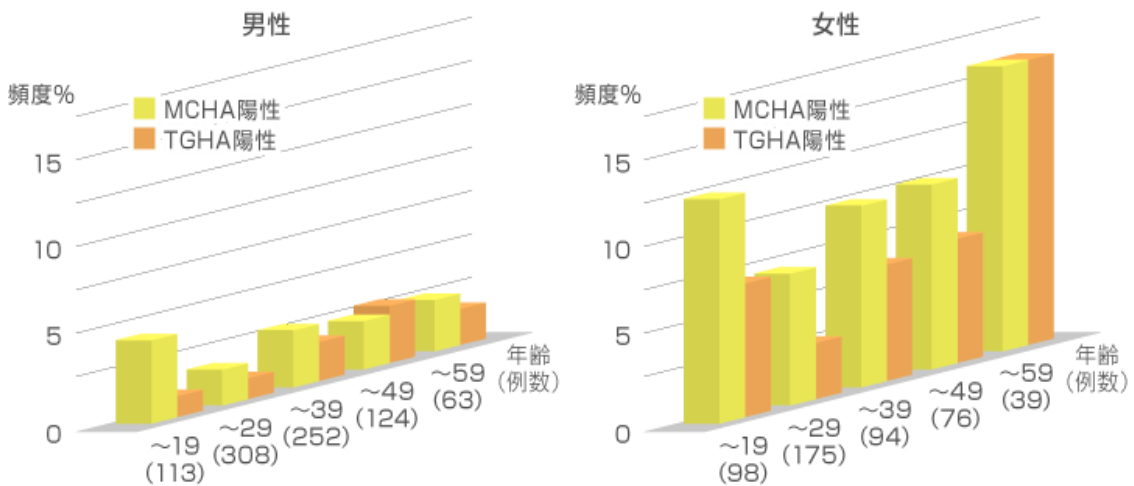


す。これを、自己免疫病といいます。慢性甲状腺炎はこの自己免疫病の代表的なものです。慢性甲状腺炎では抗マイクロゾーム抗体（MCHA）や抗サイログロブリン抗体（TGHA）などのような甲状腺組織に対する自己抗体が陽性に出ます。今は、抗ペルオキシダーゼ抗体（抗TPO）や抗サイログロブリン抗体（抗Tg）を測ります。これらの抗体が陽性であれば、慢性甲状腺炎を持っているわけです。



下記の図のように、男性と比べて、女性の場合は、年齢とともに慢性甲状腺炎の頻度が増えていきます。非常に多い病気だということが分かります。

### 慢性甲状腺炎の頻度



---

## 慢性甲状腺炎の臨床上の問題点

---

慢性甲状腺炎には5つの問題があります。

1	びまん性甲状腺腫	甲状腺が腫れること
2	甲状腺機能低下症	甲状腺の働き不足
3	無痛性甲状腺炎	甲状腺ホルモンが一時的に高くなったり低くなったりすること
4	急性増悪	甲状腺が痛くなること
5	悪性リンパ腫	甲状腺にリンパ球のシコリができること（大変稀です）

1つめの問題は、甲状腺が全体的に腫れることです（できものの病気と違います）。これを“びまん性甲状腺腫”と言います。甲状腺の腫れが大きいときは甲状腺ホルモン剤を飲むと腫れが縮むことがあります。

2つめの問題は、甲状腺の働きが落ちることです。これは甲状腺機能低下症と言います。

甲状腺機能低下症は海草を控えるか甲状腺ホルモン剤を飲みます。甲状腺ホル

モンは飲み過ぎると、骨が弱ることがあります（骨粗鬆症）。しかし、甲状腺の働きを正常にする量では骨は弱りません。

3つめの問題は、出産などを契機として甲状腺の働きが異常になることです。出産後でなくても起こります。これを無痛性甲状腺炎と言います。慢性甲状腺炎をもつ人は、出産後には甲状腺ホルモンを調べたほうが良いでしょう。

4つめの問題は、慢性甲状腺炎の人で稀に甲状腺部に痛みを訴える人がいます。これを“慢性甲状腺炎の急性増悪”と言います。症状は亜急性甲状腺炎と同じく甲状腺部の痛みと発熱です。亜急性甲状腺炎と違うところは、副腎皮質ホルモン剤で治療してもなかなか治らないことです。場合によっては、1～2年間も副腎皮質ホルモン剤を中止できない症例もあります。このような場合には、手術を要することもあります。

5つめの問題は、稀ですが甲状腺に“悪性リンパ腫”がでてくることです。しかし、このタイプはリンパ球のB細胞ですので、治療によりほとんどの場合治ります。一般の悪性リンパ腫はリンパ球のT細胞であり、命を落とすこともあります。ここが甲状腺悪性リンパ腫と大きく違うところです。